

私たちは祈りの最後に「イエス・キリストの御名によって祈ります」という言葉を用います。ここで、イエスは「わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。」と言った、と記されています。このように祈るのは、イエスが私たちと神さまとの間に立って執り成して頼んでくれるということではありません。私たちの祈りが、イエスと一つにされた者の祈りとして、神さまの元に届くということであり、ここに信仰においてイエスと一つにされることの一面が現れています。それが可能になるのは神さまが私たちを愛しているからです。28 節の言葉はヨハネ共同体の信仰告白をイエスの口を通して記したものと思われまます。それは、イエスは神の子であったが、父なる神さまのもとからこの世に遣わされた方であり、受難と十字架の死、それに続く復活の出来事によって、この世を去って再び父なる神さまの元に行くという、この福音書のイエス理解を示しています。神さまを信頼するということは、漠然と、天と地を創られた方がおられるということではなくて、聖書に記されている言葉と行いによって、イエスが神に等しい者であることを知り、その方を信頼し、その方と共に歩む、そのような信仰なのです。

そして、33 節で、「勇気を出しなさい」と、別れの説教を締めくくっています。「勇気を出す」という単語は「くよくよしていても仕方がない。とにかくがんばれ」というような意味ではありません。そのような意味であれば、勇気が出せない自分に不安になったりします。この「勇気を出す」と訳された単語は他の福音書に5箇所に出てきます。中風の人癒しの記事でイエスは中風の人に「元気を出しなさい。」と言い、また、弟子たちが湖の上で暴風に遭い、湖上を歩いて近づいて来たイエスを見て「幽霊だ」と怯えた時、イエスが彼らに「安心しなさい。」と言いました。さらに、盲人バルティマイを癒す記事で人々は盲人に「安心しなさい」と言いました。この「元気を出しなさい」「安心しなさい」はいずれも「勇気を出す」と訳された単語と同じです。いずれも、イエスと一つにされている、イエスが共にいるから、安心しなさい、勇気を出しなさい、という意味なのです。「勇気を出しなさい」とは、復活させられたイエスが今も生きて、共にいることによって、私たちも自分を見失わないで生きていく、困難な課題・苦しみ・悩みを乗り越えていくことができるということなのです。